

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第2号 (2000年1月1日発行)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001959

季刊

国立国語研究所
広報誌



2000年

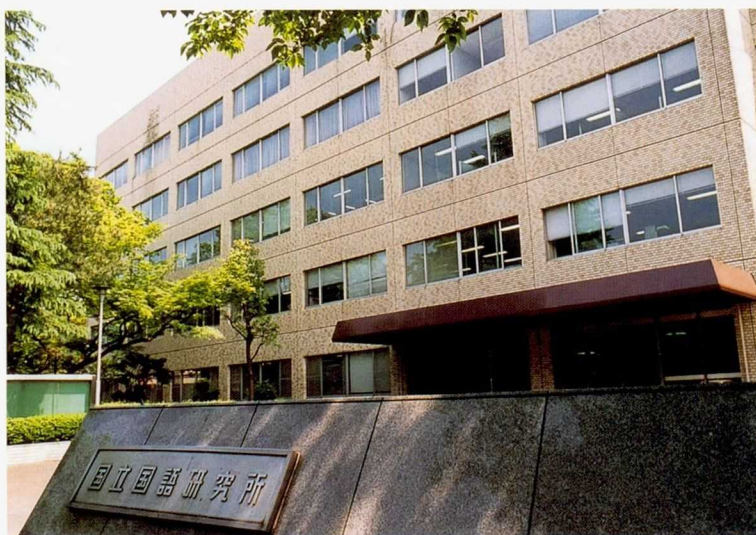
もくじ

連載 暮らしに生きることば②	p.1
連載 国立国語研究所の紹介② 21世紀を迎える国立国語 研究所の在り方	p.2
研究プロジェクト紹介 現代雑誌200万字言語調査	p.3
研究成果の紹介 新プログラム 「国際社会における日本語につ いての総合的研究」の研究成果	p.4~p.5
事業の新展開 国語研コーパスの構想	p.6
ことばQ&A	p.7
終了報告 国際シンポジウム第5専門部会	p.7
ことばフォーラム	p.8
日本語教育衛星通信講座	p.8

あけまして
おめでとーうーいす
ます

国語研の窓

平成12年1月1日 第2号
 発行 国立国語研究所
 The National Language Research Institute
 編集 国立国語研究所企画広報委員会
 〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
 電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530
 URL <http://www.kokken.go.jp/>



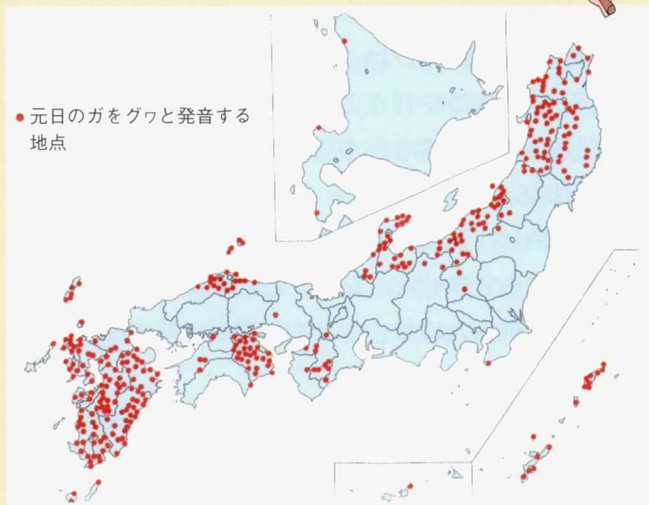
国立国語研究所正門

連載第2回 暮らしに生きることば



お正月にちなんで、「元日」の頭の音を取りあげてみましょう。

元日のガをグワのように発音する地域があります。歴史的仮名遣いでは、元日の「元」を「ぐわん」と表記します。今は、ガンと読みますから、歴史的仮名遣いと現在の発音は異なります。この「ぐわ」のような表記は、中国語での漢字の発音を表すもので、「合拗音ごうようおん」と呼ばれます。火事・菓子のカを「くわ」と書いたのもそれにあたります。お正月のガも「ぐわ」です。現代仮名遣いでは「か・が」で表し、「ぐわ」は用いません。右の地図は約40年前の調査結果ですので、現在では耳にする機会がさらに減っています。



国立国語研究所『日本語地図』第1集（1966年刊）第5図より

連載 ②

国立国語研究所の紹介

21世紀を迎える国立国語研究所の在り方

国立国語研究所長 甲斐睦朗



新年明けましておめでとうございます。

国立国語研究所は、いよいよ来春の平成13年4月から独立行政法人として新しく生まれ変わることになり、本年は、独立行政法人へ移行する最後の年になりました。そこで、今回は、新年号でもありますので、前号に予告しました国立国語研究所の50年をふり返るといふ連載の趣旨を改めて、21世紀を迎える国立国語研究所の在り方について申し上げることにいたします。

新しい独立行政法人国立国語研究所の目的は、独立行政法人国立国語研究所法に、次のように規定されています。

(研究所の目的)

第三条 独立行政法人国立国語研究所（以下「研究所」という。）は、国語及び国民の言語生活並びに外国人に対する日本語教育に関する科学的な調査及び研究並びにこれに基づく資料の作成及びその公表等を行うことにより、国語の改善及び外国人に対する日本語教育の振興を図ることを目的とする。

この目的は、現在の研究所の目的と基本的に異なるものではありません。なお、ここには、現在も実施している外国人に対する日本語教育に関する事項等が明示されました。

この目的の達成のために研究所が対象とするものとして、国語、国民の言語生活、外国人に対する日本語教育の三種があります。そして、業務としては、

それらに対する調査及び研究、これに基づく資料の作成及び公表等、外国人に対する日本語教育に従事する者等に行う研修の三つに大別されます。本研究所は、現在、この目的を達成するための独立行政法人移行後の在り方全般について検討を行っております。

本研究所は、創立50余年、国語の改善及び国民の言語生活の向上を図るために、国語の現状等について様々な見地から調査研究を進め、その成果等について公表を行うとともに、調査研究に基づく事業を進めて参りました。

平成10年度から、識者の方々をお願いして外部評価委員会を設置し、本研究所についての評価をお願いしました。委員会においては、国語の研究所は、国公私立を通じて唯一無二であり、21世紀においてもその役割は重要であること、国語の改善や国民の言語生活の向上のために一層力を尽くすべきこと、世界の日本語関係者が当研究所からの情報発信を期待していること、更に、研究所の目的・使命を達成するには、調査研究の推進とともに、その成果については、研究者を対象とした発表・資料の提供にとどまらず、広く公表して、国民の言語生活の向上に資すべきこと、また、その成果を大学院教育に反映させることが重要であるというご指摘を頂きました。

本研究所は、これらのご指摘をしっかりと受けとめ、本研究所の在り方を検討し、本研究所の目的・使命を達成したいと考えております。



現代雑誌 200 万字言語調査

相澤正夫 (言語体系研究部長)

21世紀を目前にして、わたしたちをとりまく世界は激しく動いています。日本語やそれを使って営まれる日常の言語生活も例外ではありません。おそらく誰もがことばが変わりつつあるなど実感しているはずですが、どこがどう変わっているのかと改めて問われると、すぐには答えられないのではないのでしょうか。

マスメディアや印刷技術の発達のおかげで、大量の情報が毎日休むことなく届けられています。ずいぶん便利な世の中になりました…、と書くといいことばかりのようですが、実際はそうとばかりも言てはいられません。ことばが洪水のように押し寄せて、溺れてしまいそうだよという本音も聞こえてきそうです。

国立国語研究所では、これまでも新聞や雑誌、テレビ放送などマスメディアによって流されることばの調査を精力的に行ってきました。どれをとっても広い範囲にわたって強い影響力をもつ発信源ばかりです。日本語は一体どうなっているのかと考えるときに、これらのメディアで実際に使われていることばは、絶対に対象から外すわけにはいきません。

今回の「現代雑誌200万字言語調査」プロジェクトも、国立国語研究所の仕事としては、このような流れの中に位置付けられる企画です。雑誌というメディアを選んだことには、大きく三つの理由があります。

一つ目は、言うまでもなく、現代日本語の書きことばの実態を正確に捉えるということです。国立国語研究所は1956年に「雑誌90種調査」を実施していますが、その後の社会情勢の激しい変化を考えると、すで

1956年と1994年の雑誌資料



1956年と1994年の雑誌です。紙面の大きさ、写真の使い方、縦書き・横書き、文字の大きさ・色使い・書体、漢字の種類や形、振り仮名の付け方、カタカナの比率など、大きく変化しています。

漢字(麵・麺)の具体例



「麵」という字の出現度数は、1956年のゼロに対して、1994年は20回以上です。話題の変化もありますが、かつて仮名表記にされたものが再び漢字表記になってきた例です。字体も左側の「にょう」の部分に、「麥」のほかに現代風の「麦」が使われています。

に情報が古くなっていることは明らかです。まず、情報の更新が必要だと考えました。

二つ目は、雑誌というメディアが、新聞と比べて多様な日本語を反映していると予想されることです。広範囲のメディアとしては新聞に軍配があがりますが、ことば遣いや表記についての統制も強いようです。ここでは、書きことばの多様性を捉える道を選びました。

三つ目は、前回1956年の調査と今回の調査結果の比較を通して、20世紀後半における日本語の文字、語彙、文法の変化の様子が具体的に明らかにされることです。これによって、21世紀に向けて日本語の将来の一つの見通しが得られるものと考えました。

国立国語研究所では、1994年の1年間に大量の月刊雑誌を計画的に買い込んで、調査の準備を整えました。(実は本屋に注文しておけば必ず手に入る…というほど甘い話ではなかったのですが。)もちろん全部を調査対象とすることは不可能です。まず、約70種を分野の偏りがないようにバランスよく選び、そこからさらにサンプルを採るという方法で基礎データを作りました。現在、データの電子媒体化が終わり、集計の準備に入ったところです。

「200万字」というのは、実はこの基礎データの総文字数です。これは、新書判で約25冊分に相当する分量です。この宝の山を今後数年のうちに集計し分析して、21世紀の初頭には何とか成果の公表に漕ぎ着けたいと、チーム一同仕事に精を出しています。



新プログラム

「国際社会における日本語についての総合的研究」の研究成果

日本が経済的に発展し国際的な役割が大きくなるにつれて、学術的な研究はもちろん、文化・経済などいろいろな方面で日本語を通じた国際相互理解の必要性が高まってきました。経済的進展の度合いは一時の勢いを失ってはいますが、日本および日本語を取り巻く国際化の傾向は依然として続き、日本語学習者の数は200万人を越えるまでになっています。今や日本語が日本人だけの、また日本語学的な視点からだけの研究対象であった時代は終わり、国際社会における日本語の使用実態を多角的に研究するとともに、日本語を国際的に一層流通させるためのあるべき姿を学術的に追究する時期に来ているといえましょう。しかしこれまで、この問題に正面から取り組んだ学術的研究はありませんでした。

幸い、文部省科学研究費補助金（創成的基礎研究費）から多額の経費をいただく機会を得ましたので、国立国語研究所が中心となった新プログラム方式による研究「国際社会における日本語についての総合的研究」（研究代表者：水谷 修）を行う運びとなりました（略称を「新プロ「日本語」」といいます）。この研究は、1994年4月から1999年3月までの五か年をかけて行われたもので、外国人も含めて百数十名の研究者によって、次のような四つの研究グループに分かれて実施されました。

- 「日本語観国際センサスの実施と行動計量学的研究」（研究班1）
- 「言語事象を中心とする我が国を取り巻く文化摩擦の研究」（研究班2）
- 「日本語表記・音声の実験言語学的研究」（研究班3）

■ 「情報発信のための言語資源の整備に関する研究」（研究班4）

研究のまとめりに、各研究グループの成果を次号以下で数回にわたってお知らせする予定ですが、全体としての成果は次のようにまとめることができます。

1. これまで海外での日本語の位置や日本語のイメージについて、いろいろな人がいろいろなことを述べてきました。それらの多くは、限られた経験によるものであり、妥当な知見が得られている側面もありますが、どれほどの普遍性をもつのか定かではありませんでした。それに対してこの「日本語観国際センサス」は、日本語に関する地球規模での多角的・客観的な調査研究を実施したもので、それによってこれまでの所見に比べて実証的な確認を一步前進させることができました。〔国際的に対応を要請される研究〕
2. 従来的人文科学研究の領域では、実用的あるいは問題解決型の研究はきわめて稀でした。本研究では、この方面に意図的に接近しようと試みたこともあって、社会のニーズに^{こた}えたり国や社会へ提言できる成果がいくつか生まれました。その成果のとりまとめができた部分については、新聞・テレビ・ラジオ等のマスコミで取り上げられ、その反響は少なくありませんでした。〔国民や社会のニーズに答える研究〕
3. 日本語を地球規模で総合的にとらえる努力をした結果、日本語に関するこれまでの研究調査で知られ

ていなかった多様で新しい膨大な調査資料が得られました。その収集・整理・分析段階を通して、今までの手法ではできない新しい研究法で立ち向かわなければならない作業に直面しました。その結果、新しい研究領域が育つ芽ができました。〔学問の新分野開拓〕

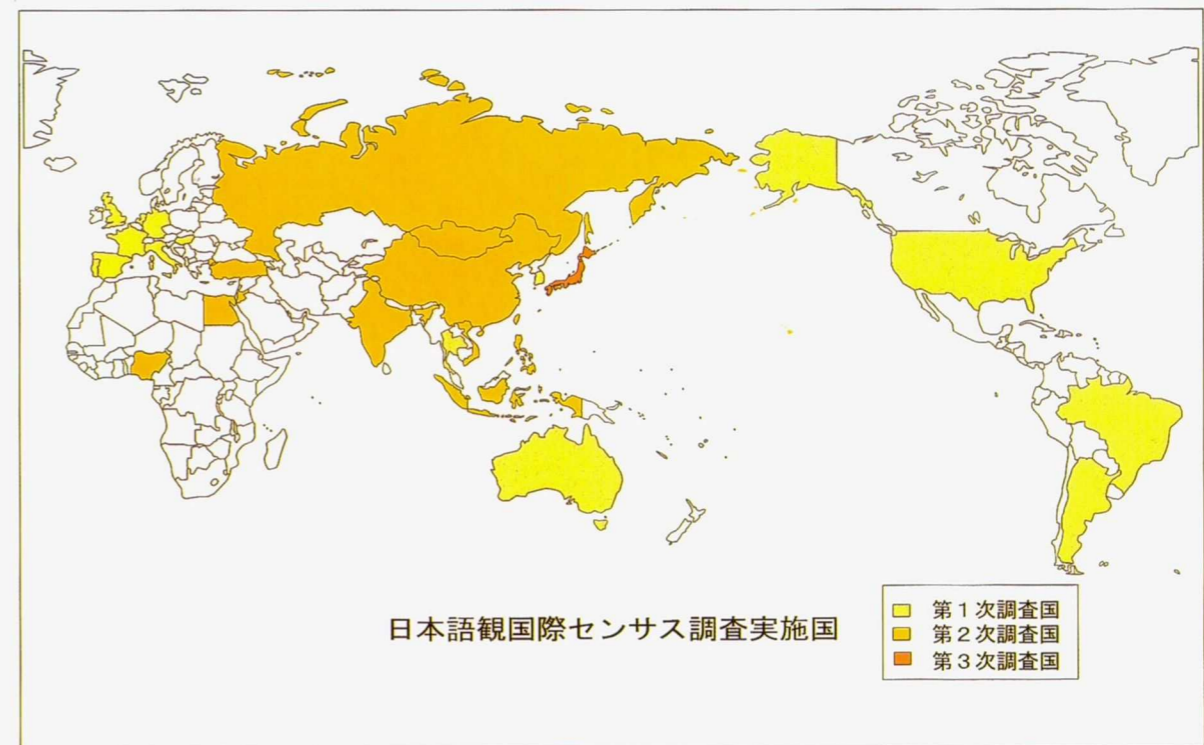
4. 各研究班・各チームにおいて、研究を進めていく過程で、海外を含む人的ネットワークが作られ、新プログラム研究終了後にも継続および新規の共同研究を実施するための核ができました。〔研究体制の整備〕

まさに『創成的基礎研究』の名が示すように、新プ

ロ「日本語」からはいくつか研究の芽が育ちました。このプロジェクト研究を起点として、さらなる研究の進展を誓うとともに、研究継続の成果が国立国語研究所、ひいては関係諸学界の発展に寄与できることを強く祈っています。

研究の成果は、これまで国際シンポジウム、講演会や報告書などによって公表してきましたが、インターネットのホームページでも見ることができます。まだ未完成の部分もありますが、順次拡充していくつもりですので、国立国語研究所のホームページともどもどうぞご覧ください。

アドレスは <http://www.kokken.go.jp/jalic/> です。



事業の新展開

国語研コーパスの構想

<国語辞典編集室>

1 コーパスとは

ことばの研究を高度に行うためには、質のよいデータを大量に用意する必要があります。一定の方針に沿って書きことばや話しことばを大量に集め、コンピュータを使って必要な情報を自在にとりだせるようにしたものをコーパスといいます。コーパスの作成や研究は、英語をはじめとした欧米の言語学が進んでいますが、最近では、中国語や韓国語などアジアの言語でもコーパスの作成が本格的に進められるようになっていきます。

日本語についても、これまで、色々なコーパスが作られてきましたが、大規模なもの、機械翻訳や、ワープロの仮名漢字変換装置などの開発を目的とするものでした。ところが、英語などでは、ここ10年ぐらいの間に、そうした機械への応用ということではなく、英語の研究や教育、辞典の編集などのために、何十億語もの用例からなるコーパスが国家規模で組織的に作られ、広く利用されるようになってきています。おそらく21世紀のはじめには、日本語でも、コーパスが利用される範囲は、大きく広がっていくでしょう。

2 国立国語研究所のコーパス構想

国立国語研究所は、創立以来、日本人の言語生活ではどのような単語がどれぐらい使われているのかについて、大量のデータを利用した統計的な調査を重ねてきました。また、10年ほど前からは国語辞典編集室を設置し、日本語でこれまでに使用されてきたすべての単語を集積した大辞典を編集することを目指し、さまざまな資料から用例を採集してコンピュータに蓄積することを始めました。いずれも、個人の研究者や大学の研究室では行うことができない大きな事業です。こ

うして蓄積されてきている大量のデータを、一定の形式にとりそろえ、一つの集合体にとりまとめ統合して、目的に応じて自在にデータを引き出せるようにしようというのが、国立国語研究所のコーパス構想です。

国語辞典編集室で採集した用例を核として、各研究室で作成されたデータをあわせ、さらに、所外の研究者と共同で進めている研究プロジェクトで作成されたデータもとりにこんで、「国語研コーパス」を作成します。こうして作られたコーパスから、企業や他機関に情報を提供し、また、反対にデータの提供を受けることで、コーパスの質を高め、規模を拡大していくことができると思っています。



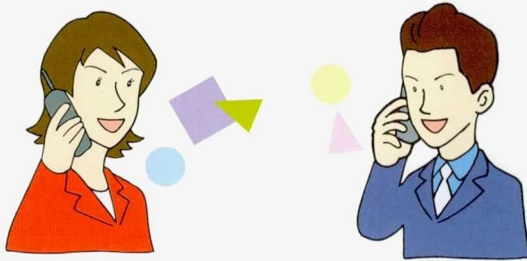
ことば Q & A

日頃のことばづかいで、とかく気になるのが敬語の使い方です。しかし、一つ一つの敬語の使い方でも、よく似た使い方に共通する考え方を知っていると役に立ちます。その一つが次の考え方です。

自分からかけた電話に「お」を付けるのはおかしくないですか？

質問 会社で取引先に電話をしました。「先ほどはお電話で失礼しました。その時の私どもからの御提案ですが、……」と私が言ったのを同僚が聞いて、「自分からかけた電話や自分から出した提案に『お』や『御』をつけるのはおかしいのじゃないか」と言います。どう考えればよいのでしょうか？

回答 結論としては、この場合の「お」や「御」は間違いではありません。言うまでもなく「お・御」は、敬うべき人や取引先の人への動作や持ち物に付けて、その人への尊敬を表す時にも使うことばです。しかし、もう一つの使い方があります。動作やものが自分のものであるとしても、それが敬うべき人や話し相手に直接に向けられるものであるときに、その人に対するへりくだりの気持ちを込めて使うという使い方です。お尋ねにある「お電話」も「御提案」もこの使い方に当てはまりますから、間違いではありません。



この他に、「お願い」「お手紙」「御案内」「御報告」などについても同様の疑問がわく場合がありますが、その動作の相手が敬うべき人や話し相手である場合には間違いではありません。



国立国語研究所

第7回 国際シンポジウム

第5 専門部会「日本語教育の国家的標準」

平成11年10月4日(月) 国立国語研究所講堂

世界の様々な地域で、日本語教育の国家的な標準や指針を作る動きが始まっています。第5 専門部会では、アメリカおよびオーストラリアにおける動きを、それぞれの地域の専門家からの報告を受け、討論しました。

アメリカでは、教育の質の向上を目指すゴール2000のプロジェクトが、ブッシュ前大統領の提唱で始まりました。その中で外国語教育の目標として、「アメリカの生徒全員が英語のほかに、もう一か国語使えるようになることはコミュニケーション上重要である」といった理念が掲げられ、1993年から国家的標準を作るプロジェクトが始まりました。そして1999年に「標準」が出版されましたが、そこには頭文字をCでそろえた五つのゴール（コミュニケーション、カルチャー、コネクション（他の教科との関係）、コンパリソン（日本語と母語との比較）、コミュニティ）が挙げられています。

一方、オーストラリアでは10年ほど前から数年間「津波」と形容されるような日本語学習ブームが押し寄せました。ブームには1991年の言語政策の発表でアジア言語の学習が強調されたことが大いに影響しています。ブームが落ち着いた現在では、言語の運用能力ということよりも、異文化理解が重視されているとの指摘もありました。



ことばフォーラム

平成11年11月13日(土) 国立国語研究所講堂
言語行動研究部第二研究室
言語行動研究部第一研究室
言語変化研究部第一研究室



国立国語研究所では、ことばに興味と関心のある方々を対象とした公開の「ことばフォーラム」を、平成11年11月13日(土)に開催しました。

「ことばの意味を調べよう」「対人関係の話しことば」というテーマの二つの公開講演を行うとともに、三つの研究室を公開し、「話しことばの研究方法」「人がかわるとことばもかわる(ことば遣い)」「方言地図の見かた・読みかた」を紹介しました。研究室公開では、担当者の説明やデモンストレーションの後も、熱心な質疑応答が続いていました。

参加された約100名の方々からは、「勉強になりました」「またお願いします」などの声が多く聞かれました。国立国語研究所では、今後も「ことばフォーラム」をはじめとする公開事業を行っていきたいと考えております。



日本語教育衛星通信講座

平成11年11月16日(火)

地球上の離れた地域の間で、同時刻に、双方向的に顔を見ながら授業ができる…ひと昔前には夢のような話でしたが、今は実現化が進められています。衛星通信を使った日本語教育の可能性を探る文化庁の試みが11月16日に行われました。国立国語研究所も会場の一つとなりました。東京・大岡山の東京工業大学、韓国の韓国外国語大学校と、赤道上に静止している通信衛星・スーパーバードで結ばれたわけです。

国立国語研究所の5階講堂にはテレビ画面が4台置かれ、日本語教師、日本語教育関係者、日本語研究者が50人ほど集まりました。朝10時半から午後5時まで、時間を忘れさせる濃い内容の衛星通信講座が進行しました。敬語などを扱う上級者向けの口頭表現授業が行われましたが、それは日本の留学生と韓国の日本語専攻の学生たちの討議や寸劇をもとに進行し、さらに、ロールプレイ、スピーチ、相互講評などからなるものです。授業の間にも、教師への説明や会場にいる人々との質疑応答などがなされ、午後の全体協議では、さらに討議が深まりました。

衛星通信を活用した日本語授業の可能性を見るだけでなく、それをどう教員研修に応用できるかを考える上で、様々な収穫をもたらしたと思います。

